

2008

オープンキャンパス

多摩キャンパス 後楽園キャンパス
8/3・8/30・31 7/27・8/30・31

未来のワタシに 出会う一日

模擬授業

学長による特別講義

「好意・善意と法」

総長・学長 永井和之 法学部教授

オープンキャンパスの特別企画である永井学長の講義を受講するため、8号館の大教室には多くの高校生や父兄が集まった。

法を学ぶ意味は

教室に緊張感が漂う中、講義ははじまり、永井学長は「法を学ぶには、どのような意味があるのか」、「どんな



ルールがあるのか」、「法のルールとジャンゲルの弱肉強食のルールと何が違うのか」と学生らに問いかけた。そのうえで、まだ法律を学んでいない高校生にも分かりやすいように、裁判の具体例を挙げて説明を続けた。

「善意」の人の過ちに法は

例えば、公園に遊びに来ていた子

供の母親が、買い物へ行くために、子供をみてあげるといつてくれた人にかかせ、買い物へ行った。「善意」でみてあげるといった人が、少しの間目を離していた隙に、子供が公園にある池に誤って落ちて亡くなってしまった。

この場合、子供の母親は、「善意」でみてくれるといった人に、損害賠償を求めることは可能であるのか。永井学長は、こう問いかけたあと、

次のように続けた。

責任を負わせて、いいか？

あくまでも、子供をみてあげるといった人は、「善意」による気持からであった。しかし、「善意」の行為をしたことにより、その善意の人が、重たい責任を負ってしまうことになる。これを、腑に落ちないと感じるのとは、ごく当たり前のことだ。

また子供を亡くした親に対する批判として、「人が善意で手を差しのべた時、たまたまミスをして犯してしまった場合、善意の人を訴えるのは、道徳に反するのではないか」という意見もある」と説明。

永井和之学長

「社会のルール」

を学ぶ

このような場合、法律とはどのように決められているのであろうか。ここでも永井学長は、問いかけるかたちで受講生



一人一人に考えることを促した。そして締めくくるように、「私達は、個人主義的社会で生きている。そのような中、法を学ぶということは『社会のルール』を学ぶ、大切なことなのです」と強調した。

多くの受講生と質疑応答

講義の後、質疑応答が行われ、永井学長に直接質問できる機会とあって、多数の学生が手を挙げた。永井学長は、「久しぶりに教壇に立った。

自分の子供と孫の中間にあたる学生に、授業をするのは難しい」と語って、受講生の笑いを誘った。

永井学長は、「中央大学の特色は」という質問に対し、「学生、個人個人を見ている」と返答。また、今後の中央大学に関する質問に対しては、各々の専門的な質問と幅広い教養に裏つけされた思考を兼ね備えた「実学」というシステムを再構築することを挙げた。

(学生記者 梶原麗奈 法学部2年)

「本当は面白い政治学―民族・国民・国家・主権をキーワードにして―」

法学部 滝田賢治 教授

滝田賢治先生の授業は、学生の間では、法学部の中でトップ3に入るほど厳しい授業と言われている。テスト前に、先輩から過去問を手に入れたて、1、2日間勉強をすれば単位が取れる、そんな簡単な授業ではない。だが実際の講義はとても面白く、90分の授業がとても短く感じるほどだ。

「サルにも分かる政治学」

滝田先生は、今回の模擬授業の

テーマをはじめは「サルにも分かる政治学」にしようと考えていたという。政治学は、一般的に、難しい、面倒くさいというイメージがあるため、それを払拭しようと、このテーマにしようと考えたそうだ。実際には、表題は変わったのだが、こんな話からはじまった模擬授業に自然に引きつけられていく。

政治学は、学問の対象であり、一番ポピュラーな定義はDavid Easton

による「希少資源の権威的配分を巡る行為と過程」と定義されている。この言葉を聞いただけでは、一見とっつきにくいと感じられるが、滝田先生は、「政治とは、国会で、家庭内、町内会で、サークル内で、見られる現象」と身近なところに例を置いて講義を進めていく。

家庭内にもある「政治現象」

例えば、父、母、子供二人の4人

家族で、お父さんが月40万円稼ぐ家庭があるとすると。その家族にとつて、40万円は希少資源に当たる。お父さんが、仕事を頑張る、なおかつ家事を率先して手伝う、休日も家族サービスをする、そうなる、家族におけるお父さんの評価は上がり、権威を持つことになる。

お父さんが、権威を持つことにより、給料40万円の使い道を、お父さんの意思で決めることができる。月20万円を、自分の小遣いにしようが、お父さんは権威を持つているため、自由に使うことができる。これが、家庭内における「政治現象」である。

滝田賢治教授

滝田先生は、「政治」とは二人以上の人間がいる世界において、必ず起こる現象と、分かりやすく説明した。そして、「この権威的配分が失敗した際に、家庭内では家庭内別居、最悪の場



合には離婚に至る」と語り、教室内の笑いを誘った。

質問飛ぶ生徒参加型の授業

滝田先生の授業は、生徒参加型授業である。前の席に座っている学生に、「グローバルゼーションの定義とは?」、「世界の国の数は?」などという、質問が浴びせられる。記者

にも「現在の外務大臣は?」と質問が飛んできた。気を緩めてはいられない。

50分の模擬授業は、集中力を切らさずにいたためか、あつという間に時間が過ぎた。受講した高校生たちは、まだまだ授業を聞きたい、と思っただけに違いない。

(学生記者 梶原麗奈 法学部2年)

「お金とは何か」 「お金」と仲良くつきあう方法

経済学部 鳥居伸好 教授

「お金とは何か」。興味をそえられる講座名に8月30日、8306教室には、多くの受講生が訪れ、授業開始前には座席の7割以上が埋まっていた。

相手をよく知り、親しみを持つ

鳥居先生は教壇に立ち、講義を始めるや否や「私の授業は評判がありまして、眠たくなります」と笑いを誘い、受講生を和ませた。これも「鳥居先生流」なのだと感じた。

初めに、お金と仲良く付きあうコツについて切り出した先生は、「相

手を良く知り、親しみを持つことが必要です」と強調した。普段、お金に対して、意識して仲良く付き合ったり、親しみをもって接するなど考えたことがないだけに、話の内容はとても新鮮だ。

カメラ目線でポーズとる先生

途中、記者が記事に掲載する写真を撮るため、鳥居先生にカメラを向けると、先生は話を止めてカメラ目線でポーズをとり、「ポーズをとってみました」と言って、またまた受講生の笑いを誘った。なんだか親し



鳥居伸好教授

みが湧いてくる。

次に話が進んだのは、「お金の魅力と魔力」についてである。「金が物を言う」ということわざについて、「お金の威力は絶大であるということとを例えている」と解説し、続いて、講義の最大のテーマである「お金とは何か?」に移った。

貨幣とは価値のかたまり

そこで鳥居先生は、お金の力ほど

(Ware、商品)とG (Gold、貨幣)で書かれた図を使いながら授業は進んでいった。

国家貨幣と銀行券の違いは

続いては、国家貨幣(政府貨幣)と銀行券の違いについて移り、国家貨幣は、流通手段機能(強制通用力)によって用いるのに対して、銀行券は、支払手段機能(信用)によって用いられるという違いがある、という。

これから生じているのだろうか、について講義し、「お金とは、貨幣であり、貨幣は、どんな商品でも直接交換できる社会的力を持つ。だから、貨幣の機能は、商品の動きによって変わってくる。貨幣とは、価値のかたまり」などと説明。さらに講義の内容は高度になっていき、貨幣の諸機能についてW

現在使われているお札が、中央銀行券である理由は、「政府から独立して発行するためであり、また、政府が発行するとインフレを招くからだ」。

日本最古のお札「山田羽書」

最後に先生が触れたのは、日本最古のお札である「山田羽書」と「USDoll」との共通点に関する話。「USDoll」には、「IN GOD WE TRUST」（我々は神を信じる）と書かれているのに対して、「山田羽書」には、盗難除けなどに使う「五大力菩薩のまじないの文言」が書かれている。また、どちらにも発行者のサ

インがあるという点で共通していることを教わった。

授業終了後、受講生に講義の感想を聞いてみると、受講前に「経済学部か商学部か迷っていて、参考にしようと思って来ました」と話していた16歳の於曾能美佐さんは、「お金って難しいなと感じた」と率直な感想。18歳の山中広大さんは、「大学の講義はこういうものなんだと思った」と語り、17歳の安藤啓人さんは、「高校とは違って難しいイメージをもっていたけど、授業はわかりやすかった」と話してくれた。

（学生記者 上田雄太Ⅱ文学部3年）

「日本企業の東南アジアビジネス」

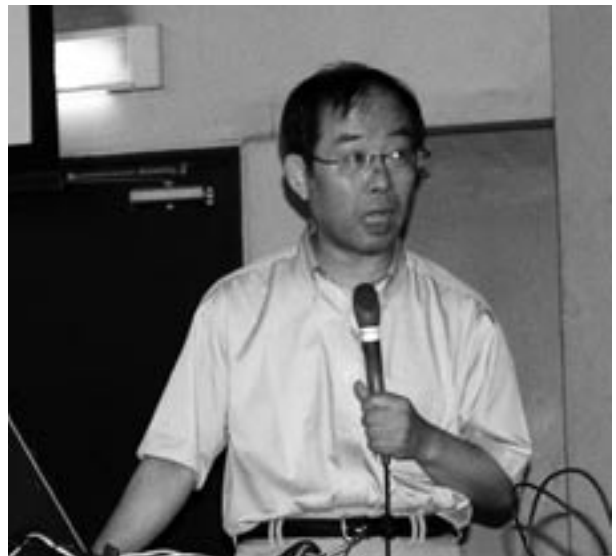
商学部 桐山昇 教授

開始10分前に、教室はほぼ満席に近い状態。みんな、大学案内などのパンフレットを熱心に読んでいる。5分前にもなると立ち見がでるほどの盛況になった。

多様な文化が混在する東南アジア

講義がはじまった。連日の猛暑と

熱気で教室内はかなり暑い。桐山教授は「東南アジアでは35℃くらいの暑さが一年中続くのですよ」と笑いながら切り出した。東南アジアは大部分が熱帯に属するため降水量が多く、夏には急な雷雨やスコールが多発する。言語は一つの国にいくつもあり、宗教も四大宗教がすべてあるなど多



桐山昇教授

進出国であり、日系企業のタイ経済に与える影響、貢献は大きいものとなっております。在タイ日系企業は部品メーカー、JCC加盟企業、製造業、サービス業など7000社にも及ぶという。「特に自動車産業の発展がめざましく、アジアのデトロイトと称されているほどなのです。中

様な文化を持っている。

「19世紀に東南アジアはタイ王国を除いて、全て欧米植民地となりました。その後、独立のために戦争をした国もあります」と桐山教授は東南アジアの歴史を解説。唯一独立を保ったタイはASEANに1967年の結成時から加盟。講義は、このタイに焦点を当てて進められた。

タイの日系企業は7000社

「タイは世界最大級の日系企業

でもトヨタは1960年代から部品作りを行っていました」。1980年代には急激な高度経済成長を遂げ、日系企業の就業者数は558万8000人にものぼる。

技術習得など労働者の育成はかる

一方で、貧富の格差を改善するため、初等教育に力が入られ、近年では識字率や中等教育の進学率が上昇した。しかし、桐山教授はこうも話した。「東南アジアではまだまだ初等教育

を受けられない子もいます。その土地の言語を母語として話せる人も多くはない、という現状があるのです。

タイの日系企業は、労働者の育成も図っている。「2007年6月に開校した春日工業大学でインターシップなどのカリキュラムを実施したり、盤谷日本人商工会議所が4年間の奨学金を提供するというのもしています」という。桐山教授は、「いかにしてそこで働いている人々とコミュニケーションをとるか、いかに彼らに技術を習得させるかというのが課題なのです」と強調した。

「難しかった」と聴講の高校生
授業を真剣な眼差しで聴講してい

た何人かに感想を聞いてみた。公認

会計士を目指す高校1年の男子（八王子市）と、商学部が第一志望という高校3年の女子（青梅市）は、いずれも「とても難しかった」。また一緒に来ていた保護者の方も「なかなか頭に入ってきたににくい」と感想を語ってくれた。

講義は普段の授業の90分から50分に縮めているものの、内容は普段通りで、受験生向けに変えてはいない。「難しかった」という受験生にも、大学の授業はこういうものだ、という印象が強く残ったことだろう。（学生記者 野村茉莉亜Ⅱ商学部2年）

「フランスのゴシック大聖堂」

文学部 小野潮 教授

完成には数百年も

フランス各地にあるゴシック大聖堂は、12〜13世紀に多くつくられたゴシック様式の司教座教会（カテドラル）である。初めの5分程度、そ

のゴシック大聖堂がスクリーンに映し出され、フランス語が流れるビデオを見た後、「当時としては圧倒的に巨大な建物で、その完成には数百年かかることもありました」と説明が入り、模擬授業が始まった。



小野潮教授

も大事なものであった」と、フランスにおけるゴシック大聖堂の歴史的的重要性を説いた。

ランス、アミアン、シャルトル、ボーヴェの町のゴシック大聖堂などのスライドを見ながら、講義は進んでいく。ランスにあるカテドラルでは、フランス歴代の国王の戴冠式が行なわれた。また、中世は文字を読める人間の数がそもそも多くない、そうした状態にあつては「カテドラルの建物が彫刻、ステンドグラスなどによって聖書」の役割を果たしたのだという。

建物自体が聖書の役割を

五感すべてを刺激する巨大な装置

続けて小野教授は、「ゴシック大聖堂は、歴史において重要な役割を果たし、フランス人の生活にとって

「中世は字の読める人が少ない。そのようななかで、柱や入り口、ステンドグラスなどにどこまでい

るカテドラルの装飾は、聖人伝を表しました。また、その建物のなかで賛美歌が歌われたりして、見たり聴いたり、五感すべてを刺激してキリスト教信仰に誘うという、巨大な装置としてありました」

ゴシック大聖堂の建築物としての構造の特徴は、やはりその装飾と大きさにある。

「天井のところにある交差リブがあつて、飛梁（フライング・バットレス）に建物の重さが伝わり、またトリフォリウムに重みが伝わる。このような構造になっているからこそ重さが壁に伝わらないので、大きな窓が作れ、光がとり込める」と小野教授。だからこそ、窓をステンドグラスにすることが可能になったのだ。配布されたレジュメを見ながら講義を聞いて、建築に関する専門用語はよくわからなかったが、納得した。

巨大大聖堂は信仰のシンボル

中世においては、農村から都市に出てきた人々が、新しい都市をつくっていく。街の大きさに比べ巨大だったゴシック大聖堂は、そのように新しくできた都市のなかでの「信

仰のシンボル」であった。「当時6千人ほどの人口だったシャルトルの街のゴシック大聖堂は、その全人口を入れてもあまりあるほどの大きさだった」というから想像を超える規模だ。

このような巨大な建物は、日常他では接することのない「閉じられた異質な巨大空間」をつくりだすことに成功する。「ステンドグラスにより、色がかわつて光が中に入ってくる。当時、発光体は太陽光や火しかなく、このような種類の光はなかった」という。ネオンなどがある今は違って、人々が見慣れていない光。通常とは違う光が、他にはない室内空間をつくりだす。

ゴシックに似た東京都庁舎

実は、東京にもこのゴシックを真似た建築物が見られるという。それは、「都庁」である。「ノートルダムよりははるかに大きいから、もしかしたらフランスに行くよりもいいかもしれないですね」と小野教授。ところが、やっぱり東京よりは現地に行きたいと思った記者だった。

（学生記者 武田朋実Ⅱ法学部3年）

「メディア表現とは何か」

総合政策学部 松野良一 教授

「メディア表現とは何か」というテーマに誘われたのか、教室には女性の受講者が多く集まっていた。松野良一教授は、6年前まで某テレビ局でドキュメンタリー制作と人事教育研修の仕事を担当していた。「私が教育研修したアナウンサーには○とか○○とかがいますね」。誰もが知っている人気アナウンサーの名前に、教室がザワツとなる。

映像をスクリーンに映し、講義

「本日はお越しいただいてありがとうございます。さっそくですが皆さんは中大というどんなイメージを思い浮かべますか？」

「田舎」「無機質」「遠い」「タヌキ」……松野教授はそんな言葉を並べた。中大を目指す高校生には、マイナスイメージではないかと記者が疑問に思っていると、「ただです、ここできかないことが沢山あります」と言つて、教授はある

映像作品をスクリーンに放映しはじめた。教授の指導を受ける学生が1年生の時に初めて制作した作品だ。

音声の無い映像の中から、出演者の感情がずしずしと伝わってくる。「これが、映像表現が持つ効果です。たくさんメディアの中でも、映像には情緒的インパクトがあります」と教授。

「テレビには多くの仕掛けがある」

次に映し出された映像では、アナウンスする音声の上に別の日に撮影した映像が流れる。見る側は、音声と映像が「同じ時間と場所」のものと錯覚してしまう。「このようにテレビには数多くの仕掛けがあります。我々はメディアの世界に覆われているということを自覚しなくてはいけないのです」と松野教授は解説する。イラク戦争でフセイン像が倒される有名なシーンの映像もアメリカ合衆国がイラク、フセインに勝つたと



松野良一教授

いう印象を付けるために、PR会社や広告代理店により仕掛けられたものだという。

メディアに溺れないためには

「リアルワールド」の外にはマスコミが作り出す「メディアワールド」があり、さらに政府や軍による「メ

ディアコントロール」が存在する。

教授は「3重の世界の中に住んでいることを、我々は自覚しなくてはいいけないのです」と強調する。そして文字、写真、映像、携帯、web:多くのメディアの中に溺れ、メディアに支配される世界の中で生きていくためには、メディアリテラシーが必要である、という。

メディアリテラシーにはメディア機器使用能力、メディア批判・批評能力、メディア表現能力が求められる。「私たちが表現方法身につけて受け身から能動的に変化するれば、見方が変わってくるのではないか」と、メディアから身を守るためには、メディアを逆に使って表現能力を身につける必要があることを指摘する。

子ども放送局と多摩探検隊

「映像表現能力を身につける」試みのひとつとして、松野教授の研究室では小中学生にテレビ番組制作について指導する「子ども放送局」を東京、福井、名古屋、沖縄で展開してきた。①レポート②インタビュ③雑観の順で、子どもたち自身が番組を作り地域活性化を促す。「視聴者」の視点しか持っていなかった子どもたちが「テレビ制作者」の視点を獲得することでメディアリテラシーの向上が期待される。

また、「多摩探検隊」という多摩地域のケーブルテレビ5局ネットで放送している10分間の地域再発見番組も、教授のゼミで制作している。企画取材、撮影、編集、パッケージ化のすべてを学生が行う。「当時、学生が作ったものをケーブルテレビで放送する、というのは日本初の試み」で、2008年6月放送をもって記念すべき第50回を迎えた。

実践でメディア表現能力つける

「環境問題を学んだから、節電をしよう」のように理論を学んで

から実践する「Think Global ↓ Act Local」よりも、「多摩のトマトをレポートしてみても、では農業はどうなっているんだろう」と実践してから理論を学ぶ「Act Local ↓ Think Global」を教授は重視する。

「鷹の目と蟻の目、過去・現在・未来、情緒と冷静:これら三つの視点を全て理解してから、上から全体を眺めてどちらかに荷担しない客観的な視点を身につけることが、メディアに騙されずに“自分”を持つことにつながります」

そのために、メディアを使って表現する方法を獲得し、豊かな感性と人生を手に入れる。それが教授の学生に学んで欲しいことだという。50分の授業はすぐに終わった。

松野教授研究室の活動の様子は <http://blog.matsuno-lab.com/> からご覧いただけます。

(学生記者 山崎綾香 法学部4年)



「通勤電車の混雑を

緩和する逆転の発想」

理工学部長 田口東 教授

拒絶反応、というべきか、以前から理科系の授業が憂鬱でしようがなかった文学部の記者が、これまで自分で無縁と決めつけていた理工学部情報工学科の模擬授業を受けることになった。

赤いTシャツを着て講義

理工学部長でもあり、田口東教授は難しい先生だろうと思つて身構えていた。ところが、教授は、オーブンキャンパスSTAFFと染め抜いた真っ赤なTシャツを着て登場した。それが演出なのかどうかかわからないが、のつけから親近感がわいてしまった。

理工学部キャンパスの構内を学生が作ったCGで紹介するところから授業ははじまった。授業のテーマは、「通勤電車の混雑を緩和する逆転の発想」。記者も数時間かけて電車通勤学しており、混雑した電車は悩みのタネ。混雑が緩和されるなら、こ

んな嬉しいことはない。講義の内容に自然に興味湧く。

急行をなくして混雑緩和

田口教授は、混雑時はパソコンの画面が割れるほどの圧力がかかり、1つの駅で電車が混雑のために遅れると、次の駅次の駅とどんどん混雑と遅れが重なり最終的には大きな損失となるといふ。それを解消するには、どうしたらよいか。田口教授は、「通勤ラッシュ時に急行をなくして各駅停車のみを運行させることが、混雑の回避を可能にする」と考えた。

電車を増やすのはもう限界、線路を増やすには膨大なコストがかかる。しかし、全電車を各停にするのにはさほどコストがかかることはない、という。

それにしても、と記者は考えた。全電車を各停にするだけで、混雑が解消することはないだろう、利用客から苦情が来るに決まっている。そ

んな安易な考えが頭をよぎる。

乗っている時間が2分短縮

ところが実際に田口教授の研究をある電鉄会社に取り入れたところ、結果として「1人あたり平均40分電車に乗っている時間が2分短縮した」というのだ。あわただしい朝の2分は貴重だ。それも数十万人分。

教授の説明では、急行電車があると、それに利用客が集中し、乗り降りの混雑で電車の遅延が発生する。それに比べ、急行を各停に格下げして選



田口東教授

べないようにするとひどい混雑がなくなり、電車の運行がスムーズになるといふ結論であった。

授業は電車の動きをアニメーションで表現したり、統計をグラフで解説したりするなど、とても分かりやすく、気がつけばあっという間に終わっていた。理系の分野に対するこれまでの拒絶反応は、ただの「食わず嫌い」だったのかも、と記者は思い始めていた。

(学生記者 新部真子 文学部3年)